



国際・公開シンポジウム『イメージとヴィジョン 東西比較の試み』を終えて p.4



第10回東西哲学者会議 p.7



ジュリアン・サバレスキュ教授講演会 p.6

■巻頭エッセイ

池澤 優 赤川 学

■イベント報告

国際・公開シンポジウム

『イメージとヴィジョン 東西比較の試み』を終えて

ジュリアン・サバレスキュ教授講演会

「未来に合ってるだろうか?—現代テクノロジー、
リベラル・デモクラシー、道徳的向上の差し迫った必要性」

第10回東西哲学者会議

■書籍案内

『死生学研究』



池澤 優（人文社会系研究科教授 宗教学）

新聞の報道（5月30日）によると、「経済・平和研究所」というシンクタンクが発表したランキングで、日本は世界で3番目に平和な国だそうである。1位はアイスランド、2位はニュージーランド、下位の国はスーダン、イラク、ソマリアであった。注がついていて、この指標には自然災害の影響は含まれていない、とのことである。

ここでの「平和」とは戦争がないことなのであろう。ランキングの作成に戦争に反対する意図があることは推測できるし、またこの種のランキングは何を考慮に入れるかにより変わるから、順位それ自体にそれ程の意味がないことも推測できる。しかし、それにしても震災で二万人もの方が亡くなっている国を平和な国と呼ぶのは違和感がありすぎる。

平和で安全なことは、当然、好ましいことである。しかし、平和が貴重であるのは、実はそれを達成することが困難だからではないのか。同様に、安全であることも、実は極めて達成困難なことであり、平和で安全な文化的生活の一枚下には死と混沌が横たわっていると考えるべきではないのか。というより、そのような人類の弱さ（vulnerability）の認識に基づかない文明は無意味ではないのか。そのような弱さがあるからこそ、平和と安全を志向する人類の営みは尊いのではないのか。おそらく世界平和度第3位の国はいつでも153位（ソマリア）になり得るのであり、その認識に基づかないランキングは意味がない。

以上は今回の大震災の惨状を報道により見、読んだことに基づく思いである。大震災の経験により、日本の学問には一種のパラダイム変換が起きると思う（というより、起きなければ、学問としての意味がないというのが個人的な思いである）。もとより自然科学はより災害に強い都市や建物を作ることを志向するだろうし、政治学は危機管理のための行政システムを考えるであろう。しかし、人文系にとってのパラダイムの変換は、如何なる制度と文化も滅び得るのだという、人類の弱さの認識に基づく、思索の再構築になるべきだと考える。

思い返すなら、死生学は、傷つきやすさ（vulnerability）と死すべき定め（mortality）と

いう人間の本来のあり方に立ち返ることで、現代文明を問いなおすことを志向していた。現代文明は生きることを、即ちポジティブに向上し、意思するところを実現し、その障害となるものは、自然であっても自分自身の身体であっても克服することを価値とする。死生学が問おうとしたのは、その生きること中心のあり方が、生きることを欲望の方向に向けることで、逆に生きることを貧弱にしているのではないかと、いう点であろう。生きることが尊いのは、それが実は簡単に死ぬ存在だからなのである。つまり、死生学は最初から人間の弱さに基づいた学の再構築を志向していたのである。

とはいえ、現在の死生学は大震災に対応できるだけの学知を構築できていないことも確かである。死生学が今まで主に問題にしてきたのは、現代における技術・科学であり、即ち医療における臨床の現場であった。言うまでもなく、この分野はこれからも重要ではあるが、3・11を体験した死生学は、大量死（災害と戦争）の問題に展開すべきであると考え。多くの系統の課題と問題が設定されることは容易に想像できる（例えば、遺族の悲しみとケアの問題、弔いと死者儀礼の問題、死者の記憶の構築とその媒体の問題など）が、それらの基盤になるべき“哲学”が具体的にどのようなものであるべきなのか、私にもまだ見えていない。おそらく、死生学は個人の死だけでなく、共同体が、社会が、文化が、そして究極的には人類でさえ死ぬのだという認識に立つべきなのかもしれない。歴史上、文化が滅びた例は幾らでもある（インダス文明、マヤ文明、アステカ王国 etc）。そこでは多くの個人の死があったと同時に、全体の死が悼まれ記憶された。そのような集合的な死の記憶をも死生学は扱っていかなければならない。そこでの“文明の死”が我々に何を教えているのかについても明らかにしていかなければならない。東日本大震災の犠牲者を単なる犠牲者にしないためにも。



赤川 学（人文社会系研究科准教授 社会学）

2011年3月11日午後2時46分から数日間に起きた一連の出来事——大地震、津波、原発事故——について、すでに多くのことが語られてきた。この間私も、多くのことを耳にし、映像もみてきたが、現在の気分にもっとも近いのは、3月15日の福島第1原発3号機の爆発映像直後に写し出された、海外女性アナウンサーの姿である（現在でもその爆発シーンは日本では殆ど放送されないが、YouTubeでは簡単にみられる）。その女性アナは、3号機の爆発映像の直後、数秒間にわたり絶句し、語るべき言葉を失っていた。

その絶句をあえて私なりに解釈するならば、「起きてはならないことが起きてしまった」という感覚であろう。実はこの言葉、「想定外」という言葉とともに、どちらかというとな原発推進の立場に立つ人から、慙愧の念とともに語られることが多い。しかし原発に反対の立場をとる人であっても、思いは似たところがある。

個人的なことで恐縮だが、私は能登半島の寒村で生まれた。今、生まれ故郷の半径10km圏内には、2機の原発がある。もの心ついた頃にはすでに、原発設置をめぐる、おなじみの対立が生じていた。「原発は安全だし、地域発展のために必要だ」という意見と、「ひとたび深刻な事故が起きれば、半径数十キロは地図から消えてなくなる」という意見が地元の間でも対立していた。幼い頃の私は、「そんなに原発が安全なら、東京や大阪のど真ん中に作ったらええんや」と考えていた。他方、地元では賛成派のほうが優勢であり、原発は紆余曲折を経ながらも、1990年代半ばに稼働することになる。

いまでも、帰省して原発近辺をドライブすると、複雑な気持ちになる。依然として「原発はいったん事故が起ったら取り返しがつかない。だから、やめてほしい」と思う気持ちはある。しかし他方、「現に稼働している以上は、絶対に安全でなければならない」と願ってものいるのだ。だから、福島第1原発の爆発をみたときの最初の感想は、「何をやってるんだ！（怒）」、「絶対に起きちゃならんことが起きてしまった」というものだった。

あの爆発シーンは、私にとっても人生最大の衝撃であり、「終末」、「破局（カタストロフ）」の感覚と呼んでよいものだった。極端に言えば、それが起きることを想定しては生活を営むのが難しくなるような事態が、現に起こってしまっ

ているという感覚である。

この感覚に最初に言葉を与えた社会学者は、大澤真幸氏だと思われる。氏は近著『社会は絶えず夢をみている』（朝日出版社）のなかで、「今や何の役にも立たず、致命的な脅威だけをばらまきつづける巨大なゴミと化した原子力発電所をかかえ、それを廃炉にするために今後何十年も莫大な資金と労働を投入しなくてはならない日本社会」は、1986年1月28日に空中で爆発し、海面に叩きつけられるまでの宇宙船チャレンジャーのようなものだとして述べている。チャレンジャーの乗組員は、自らの船が爆破したあとも、およそ3分間、海面に衝突するまで生きていた。その3分間とは、宇宙の藻屑となって死ぬことが絶対に確実な生、（人生に意味を与える「第三者の審級」が不在となった）〈恐怖〉以外の感情をもちようもない生である。3.11の破局後、「われわれは皆、間延びしたチャレンジャーに乗っている」ようなものだ、と大澤氏はいう。

社会学的な慧眼である。私たちは今後、「巨大なゴミ」をかかえ、「起きてはならないこと」が起きた世界で、間延びした、無意味な生を生きていかねばならない。そのことに気づいてしまった人は少なくないと思われる。

しかし、である。たとえそれが神から見放された無意味な生であったとしても、私たちの生は続いていく。科学技術の文脈でいえば、「巨大なゴミ」をかかえ続けるのに必要な新技術の創造であるかもしれないし、放射線科学の文脈でいえば、「巨大なゴミ」が生み出す被曝リスクを管理し続ける問題になるかもしれない。国家レベルでいえば、地に墮ちた技術立国・日本の信頼を取り戻すことであるかもしれない。「起きてはならぬことが起きてしまった」という意味では、いずれも「あとの祭り」だったとしても、それでも人生は続いていく。“The show must go on”である。

大澤氏が、個人的な終末の破局を、友人・知人の支えで生き残ることができたとして述べているように、「間延びしたチャレンジャー」の乗組員にすぎない私たちは、それでも最後の瞬間まで、大切な人たちとともに、間延びした生をまっとうするだろう。それもまた社会学的な事実であるにちがいない。その姿に寄り添っていけばよい、と今の私は思っている。

秋山 聡（人文社会系研究科教授 美術史学）

去る2月13日に、「死生と造形文化」シリーズの国際シンポジウム第三弾として『イメージとヴィジョン 東西比較の試み』が開催されました。2007年の『イメージと聖遺物の相関性』、2008年の『礼拝像と奇跡』に続く、彼岸と此岸をつなぐものとしてのイメージを比較美術史的観点から議論することを目指した「死生と造形文化」シリーズの恐らく最後の試みとなります。今回は西洋中世美術研究の泰斗ハーバート・ケスラー先生（ジョンズ・ホプキンス大学）を基調講演にお招きすることが出来ました。『イメージと聖遺物の相関性』に参加されたエリック・トゥーノ氏の直接の師匠であり、『礼拝像と奇跡』シンポに加わってくださったゲアハルト・ヴォルフ氏も深くその薫陶を受けておられるケスラー先生は、70歳というご高齢でありながら、学期中のために4泊しか滞在できないにも拘わらず、参加をご快諾くださり、大雪のボルティモアから、当初の予定通りにご到着くださいました。ほかに海外からいずれも学期中の多忙な中を、イタリアからはミケーレ・バッチ氏（シエナ大学）、アメリカからはファビオ・ランベッリ氏（カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校）が極めて短い滞在をものともせず、参加して下さいました。また、これまでの2回のシンポジウムでは、主として日本側からの発表者は

彫刻の専門家の比重が高かったのですが、今回は少し趣向を変え、中国と日本の仏教絵画の専門家である井手誠之輔氏（九州大学）と増記隆介氏（文化庁）に加えて、日本思想史の佐藤弘夫氏（東北大学）に加わっていただきました。また前2回とは異なる試みとして、日本の西洋中世美術研究をリードされている木俣元一氏（名古屋大学）に参加していただき、日本の仏教・神道研究を専門とされるランベッリ氏と合わせて、真に東西宗教文化研究者のクロスオーバーを実現する機会を設けることができたのは、何よりの喜びです。

G-COEのシンポジウム・シリーズ「死生と造形文化」としては今回が最後となりますが、今後も暫くは宗教文化の国際比較という方向で、国内外でのシンポジウムを企画してゆく予定です。一美術史家に過ぎない私が、思いがけず死生学の研究グループに加えていただいたおかげで、研究の領域を広げることができたことを大変幸せに思います。このような機会をいただけたことに深く感謝しております。

なおこのシンポジウムの詳細な内容は、和文については次号の『死生学研究』に掲載される予定です。また英文については、Bulletinとして出版されることになっておりますので、ご興味がおありでしたらそれらをご覧くださいませと幸いです。



シンポジウム「食べられなくなったらどうしますか？ ～認知症のターミナルケアを考える」

会田 薫子（本 G-COE 特任研究員 医療倫理学）

2011年2月27日、「食べられなくなったらどうしますか？～認知症のターミナルケアを考える」と題するシンポジウムが、東京大学鉄門記念講堂とサテライト会場にて開催された（主催：日本老年医学会、共催：日本老年看護学会・日本老年社会科学会、協賛：東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」）。医療介護関係者や一般市民ら約480名が参加した。

世界で最も高齢化が進展した我が国では、終末期医療に関する諸問題が深刻さを増しており、特に、認知症が高度に進行した段階での経口摂取困難に対する人工的水分・栄養補給法（AHN: artificial hydration and nutrition）の是非については、我が国の文化を背景とした価値判断や死生観が色濃く反映されており、先進諸外国の先行知見や実践に学ぶだけでは適切な対応をとることは困難である。

そこで、国内7つの老年関係学会で構成する日本老年学会は、考え方の道筋となるものをまとめたいと考え、「認知症末期患者に対する人工的水分・栄養補給法の導入・差し控え・中止に関するガイドライン作成へ向けた検討」プロジェクト（平成22年度厚労省老健局老人保健健康増進等事業）を開始した。このシンポジウムは同事業の一環として開催された。

シンポジウムでは、日本老年学会および日本老年医学会の理事長である大内尉義氏（東京大学大学院医学系研究科教授）が事業の趣旨説明を行い、それに続いて、日本老年医学会倫理委員会委員長の飯島節氏（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）が、「認知症高齢者の終末期の医療およびケアをめぐる諸問題」と題する基調講演を行った。同学会は2001年に、「高齢者の終末期の医療およびケアに関する立場表明」を発表した。これは、終末期医療に関するガイドラインとしては、我が国の医学会の先駆けであったが、その後の10年間で諸課題はさらに深刻化しており、AHNをめぐる問題への取り組みは焦眉の急であるという。

次に、当該課題に関して臨床現場の実態を把握し、医療者や患者家族の意識を探るために実施された3つの調査の結果が報告された。

日本老年看護学会理事の諏訪さゆり氏（千葉大学大学院看護学研究科教授）は、同学会員を対象とした質問紙調査の知見から、看護職は、認知症高齢者がどのような経過をたどっている

のかを理解し、今後どのような生活を送ることが本人にとって望ましいのかを、本人、家族、多職種、多機関で話し合えるように調整することが求められていると述べた。

筆者は、日本老年医学会の医師会員を対象とした質問紙調査の結果から、AHN導入の意思決定に関して、困難を感じなかったという医師は6%だけであったことや、AHNについて、差し控えることにも施行することにも倫理的な問題があると感じている医師が多く、また、法的な問題への懸念が臨床現場での対応を一層困難にしていることなどについて報告した。

西村美智代氏（NPO法人生活介護ネットワーク代表理事）は、胃ろう栄養法を導入した認知症高齢者の家族介護者を対象とした面接調査について報告した。その結果、家族介護者と医療者間のコミュニケーションの齟齬が非常に深刻であることが明らかになった。家族介護者の7割以上は、病状の進行や経口摂取不可となった場合の栄養補給法について医師から説明がなかったと述べるなど、コミュニケーションのあり方の改善が必要であることが強く示唆された。

シンポジウム後半のパネルディスカッションでは、日本老年医学会理事の鳥羽研二氏（国立長寿医療研究センター病院長）、日本老年看護学会理事長の太田喜久子氏（慶応義塾大学看護医療学部長）、法学から樋口範雄氏（東京大学法学部教授）、臨床倫理・死生学から清水哲郎氏（東京大学大学院人文社会系研究科特任教授、本G-COE事業推進担当者）らが、施策や教育啓発のあり方について議論した。

フロアからの発言も活発で、切実な状況を語る参加者もあり、当該課題への迅速かつ継続的な取り組みを求める声が多く聞かれた。



ジュリアン・サバレスキュ教授講演会「未来に合ってるだろうか？ —現代テクノロジー、リベラル・デモクラシー、道徳的向上の差し迫った必要性」 (Fit for the Future?: Modern Technology, Liberal Democracy and the Urgent Need for Moral Improvement)

福岡 聡 (本 G-COE 特任研究員 社会哲学)

去る 2011 年 5 月 13 日、東京大学法文二号館第三会議室にて、本学の上廣死生学講座といわば姉妹関係にある、オックスフォード大学上廣実践倫理学講座の教授であらせられるサバレスキュ氏をお招きして、講演をしていただいた。会場には 40 名ほどの聴衆が参集し、今回のサバレスキュ教授の講演の主題である、エンハンスメントとグローバル・ジャスティス、そして環境問題といった一見すると相容れない問題群について、活気に満ちた議論が展開された。

講演の冒頭でサバレスキュ教授は、人類が将来消滅してしまうかもしれない要因として、先鋭的な技術力、リベラル・デモクラシー、そして人間の道徳本性の三つを提起した（この三要因を氏は「人類絶滅のパミュダ・トライアングル」と名付けている）。まず「先鋭的な技術力」であるが、現代では多くの人々が大量殺戮を行う手段を入手することが可能であり、また核兵器施設の外側には二万発の原子爆弾の原料となるに足るプルトニウムが存在している。次に「人間本性」であるが、我々の人間本性は身近な人々には利他的に振る舞うことができるが、苦難を被っているが見知らぬ多くの人々に対しては無関心である。これは我々の進化に由来する道徳心理である。最富国と最貧国との間での一人あたりの所得の格差は拡大し続けているが、他国への援助が適切に行われていない原因の一つはこうした偏狭な我々の道徳本性に由来しており、国内に目を転じてみても、現在の何千万人という国家規模では同胞間での信頼が薄いため、環境問題を解決することが困難となっている（共有地の悲劇）。そして、こうしたグローバル・ジャスティス（国際援助）の問題や環境問題を克服するにあたっては、「リベラル・デモクラシー」という国家形態（リベラルな中立性の擁護）では不適切であると教授は主張する。

グローバル・ジャスティスや環境問題を解決するにあたっては、正義〔感覚〕を我々は有している必要があるが、正義に関与する我々の傾向性として教授は、「報復 Tit-for-Tat」と「公正 fairness」という傾向性に注目している。「最後通牒ゲーム」による実験結果からすると、公正に振る舞うか（より五分五分に分け与えるか）否かは、遺伝子によって定まっており、環境からの影響は極めて微々たるものであることが分かっている（チンパンジーでは 8 対 2 の分割

でも応答側は提供を受け入れるが、人間は自分が損をしてでもそうした不均等な分割を拒絶する。また一卵性双生児にあっては提供する側の提供額と応答側が受け取ろうとする額との間に均等分割という点で相関関係が見られる。すなわち提供側が均等な分割者であるならば受け取り側もそうである。そして異人種に対する意識下の偏見・嫌悪を我々は有している。

こうした人間本性が課している諸制約から我々を解放するためにはエンハンスメント（治療的な目的以外で、自然な、あるいは人工的な手段を用いて人体の現時点での諸制約を一時的に、あるいは永久に克服することを試みる）が必要であるという見解を教授は示している。教授の念頭にあるのは、人々をより賢くし、攻撃性を少なくするエンハンスメント、認知上のエンハンスメント、および道徳的エンハンスメントである。化学物質によるエンハンスメントは日常的なものであり（たとえば、我々は覚醒効果や記憶の増進を求めて砂糖やカフェイン、ニコチンを用いるが、これもエンハンスメントである）、実際にマウスによる実験では遺伝子上のエンハンスメント（スーパー・マウス）が可能になっている。そして人々の反社会的行動には幼児期の虐待とともに遺伝子が関与しているが、プロザック（SSRI）を投与することで協調性を増し、攻撃性を弱めることが可能であると教授は指摘している。

では上記のトライアングルを断ち切るためにはどうすればよいのだろうか。政治にあってはリベラリズムの縮減が必要であり（特定の価値観の促進、生活水準を下げる、長期的政策の実行）、我々の制限された人間本性 (humanity) が人類 (humanity) に対する最大の脅威になっているため、道徳上の欠点を有し、不完全でもある人間は、その自然本性を変えるために道徳的なエンハンスメントを行う必要があるという結論を教授は導いている。

講演後には教授に対して多くの質問が寄せられ、質疑応答も白熱したものとなった。しかし今回の講演を聴いて筆者は、技術によって我々の人間本性を変えてまで人類は存続する必要があるのか、同様に、技術によってより「道徳的」となることに何の意味があるのかという疑問を抱かざるをえなかったのもまた事実である。



竹村 初美（若手研究者支援研究費受給者 宗教学）

2011年5月にハワイ大学マノア校で開催された「第10回東西哲学会議（10th East-West Philosophers' Conference）」に、死生学G-COEから4名が参加した。一ノ瀬正樹教授、福間聡・柳原良江両研究員、および筆者である。

同会議はハワイ大学イースト・ウエスト・センターの主催により、5月16日から24日の10日間にわたり開催された。会場は同大学内のイミン（移民）センター、大会テーマは「価値と諸価値——グローバルな相互依存の時代における経済と公正（Value and Values: Economics and Justice in the Age of Global Interdependence）」というものである。地元ハワイをはじめ、北米・アジア・ヨーロッパから多数の哲学思想研究者が集い、発表者総数180を越す大きな会議となった。発表テーマは多岐にわたったが、non-Western philosophyに強いハワイ大学らしく、儒教と仏教についての部会が比較的多く見られた。

我々G-COEからの参加者は、18日に一ノ瀬教授が“Rethinking the Death Penalty: Uncertainties over Harm, Blame, and Dangerousness”と題して死刑制度に関してご発表されたほか、前日17日に福間研究員が、18日に柳原研究員と筆者が、それぞれ発表を行った。一ノ瀬教授の講演内容についてはご本人の手記に譲るとして、ここでは若手三名の発表内容を簡単に紹介しておく。

まず福間研究員は、“Rawls in Japan: A Brief Sketch of Reception of John Rawls' Philosophy”と題し、日本におけるロールズの受容史を論じた。1970年代にロールズの著作を日本に紹介したのはなぜ哲学者ではなく経済学者や法学者であったのか、主著『正義論』の日本語訳の問題、80年代以降の研究に見られた不備、そして今世紀以降の新たな展開と、ロールズ受容の歴史的な流れを見渡す内容であった。

柳原研究員は、“Recasting the Concept of Surrogacy: From an Analysis of History and Development”との題で、代理出産という概念の東西における歴史を論じた。1970年代、米国の斡旋業者たちは代理出産を、科学のもたらした恩恵として提示した。だが自分の子を他人に産ませるという制度は、東アジアにも伝統的な習慣として存在していたのである。こうした東アジアの伝統的代理出産制度は、近代に入ると

抑圧されるようになった。しかし後に欧米で再提示された代理出産概念が紹介されると、抑圧されていた代理出産のニーズは再び高まり、今も市場を拡大させている。こうした歴史的経緯を踏まえた上で柳原研究員は、代理出産について議論する上で重要なのは、他者の身体を用いることを社会が許容するかどうかという倫理的な問題であると結論した。

最後に筆者は、“From Pornography to Great Earth Mother: Recent Changes in the Japanese Imagination Cast to Hawaii”というタイトルで発表を行った。1990年代以降の日本では、いわゆるスピリチュアル・ブームの中、新たなハワイのイメージが流通するようになった。「癒しの島」としてのハワイ像である。筆者はこれを、現代社会における宗教性の全域化現象の一部と捉え、現代の日本人がハワイに投影する欲望について論じた。

いずれの部会でもカジュアルな雰囲気の中、活発な議論が飛び交い、久しぶりにアメリカの大学の自由な空気を吸うことができた。スケジュール進行・会場設備・宿泊・食事など、実面的な面でも快適な環境が整えられており、スタッフの方々のご苦労が偲ばれた。

最後になるが、ご多忙を極める最中にもかかわらず私たちのために多くの時間を割いて下さった、ハワイ大学哲学部の石田正人准教授に、心から感謝を申し上げたい。





山崎 浩司（人文社会系研究科上廣死生学講座講師 死生学・医療社会学）

本研究会は今年度で 4 年目を迎えた。ほぼ毎月 1 回木曜日の夕方に法文 1 号館 215 教室で、日常実践における死生問題に関する発表と議論が活発に行われた。今年度は毎回参加者が 20 人～40 人と多く、臨床死生学・倫理学的な問題に多くの関心が寄せられているのを実感した。以下、各回発表者による要旨と感想を列記する。

第 1 回（2010 年 4 月 15 日）

緩和ケアへの移行と実施の円滑化にむけた研究とその背景——がん診療ガイドラインと QOL 評価の課題（宮崎貴久子：京都大学大学院医学研究科）

2009 年度に開始した緩和ケアへの移行と実施の円滑化に向けた研究の背景には、緩和ケア臨床で心理カウンセラーとして患者・家族とともに歩んだ経験、完治を目指した治療から緩和ケアへの移行時の諸問題の調査、QOL 調査実施時の困難さがあった。発表後に熱心にご討議いただいた「緩和ケア」の一言は、発言者の立場によってまったく違った意味合いであった。実施中の多施設前向き共同研究、インタビュー調査、文献の内容分析から、臨床に還元できる知見を提示する重要性を改めて考えた。

第 2 回（5 月 27 日）

Pet Lovers Meeting 10 年間の活動報告——日本で初めてのペトロス自助グループ（梶原葉月：Pet Lovers Meeting）

私は 2000 年より、コンパニオン・アニマル（ペット）との死別の悲しみを語りあう自助グループを運営している。2010 年 7 月にスウェーデンで行われた「第 12 回ヒトと動物の関係に関する国際会議（IAHAIIO 2010 in Stockholm）」で、10 年間の活動報告を行ったが、その前に本研究会で英語原稿を発表し、検討していただいた。安楽死を避ける傾向や、お骨への強い愛着など、日本の飼い主に特徴的な動物の「いのち」への思いにつて、欧米の研究者や活動家にどう伝えるべきか、様々なご意見を頂けた。本研究会での発表があったからこそ、慣れない海外での登壇に自信を持って臨むことができた。心から感謝している。

第 3 回（6 月 10 日）

リプロダクティブ・フリーダム再考——中絶の自己決定権をめぐる（林千章：城西国際大学人文科学研究科）

リプロダクティブ・ライツを狭義に妊娠中絶の自

己決定権と捉えれば、これは女性が自らの人生を生きる自由のためには不可欠の人権である。が、妊娠し、出産する女性の身体を、近代的な権利の主体という概念で捉えるには限界があることを、選択的中絶を批判する障害者運動は提起した。中絶が法と権利の次元ではどのように考えられてきたかを整理することで、女性運動の主張は、実はその次元を超えてリプロダクティブ・フリーダムを希求するものであることを示そうというのが、発表の意図だった。

第 4 回（6 月 24 日）

事前指示の有効性と最善の利益（日笠晴香：東北大学大学院文学研究科／日本学術振興会）

事前指示に従った治療やケアの選択が、本人の現在の利益と対立すると考えられるような場合に、本人にとって何が〈よい〉のか。本発表では、特に認知症などの場合を念頭に置いて、事前指示の有効性に関する問題に取り組んだ。その際、主として欧米での議論をふまえ、自律概念の基礎を捉え直すという観点から論じた。発表後の質疑応答では、実際の医療現場での具体例をはじめ、貴重な意見をたくさん頂戴した。これをもとに、意思決定における主体性、ある処置に伴う利益－負担、予後の評価などといった観点から、今後もこの問題を研究していきたい。

第 5 回（7 月 29 日）

ホスピス電話相談から見えるがん患者の現状（藤本啓子：東神戸病院緩和ケア病棟）

当緩和ケア病棟の入院予約状況は、患者が入院面談を希望してから面談まで 2 か月近くかかり、入院するまではさらに日数を要するため入院を待つ間に死亡する患者が増えている。そうした背景には、急性期病院が治療対象とならない患者に早めのホスピス予約を勧めていることや、介護を必要とするがん患者が、行き場がなくなり介護難民となってホスピスに流れて来るなどがある。限られた資源を公平に配分するという公正の観点から予約時に様々な対応をとっているが、参加者とのディスカッションで、緩和ケア病棟としての本来の役割について再考する機会を得た。

第 6 回（9 月 16 日）

口腔ケアと死生学——終末期患者の口腔ケアと死生学の意外な関係（阪口英夫：東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科）

終末期患者や要介護高齢者にとって、最後まで食べることを維持する目的で行われる口腔ケアは、その発祥が如何なる分野であるのか、長い間知られていませんでした。しかし、昨年、1973年にOral careをタイトルに世界で初めて出版された書籍「Terminal patient / Oral care」が発見されました。本書籍は歯科医学や看護学の書籍ではなく、1967年に設立された死生学財団から出版されており、終末期医療における口腔ケアの諸問題を解説した書籍でありました。本書籍の内容をご参加の皆さんにご紹介し、多くの知見を頂きました。

第7回 (10月14日)

「ハンセン病胎児標本問題」からの考察——生と死の合差から (関正勝・孫和代・花崎皋平・松浦順子：くるみるまれるいのちのつどい)

ハンセン病熊本判決後、発見されたホルマリン漬けの「胎児標本」は、隔離政策の中で、患者の「生と生殖の諸権利」がいかに侵されてきたかを示すものであった。報告では、強制堕胎された女性の被害体験を録音テープで聴き、子供を産むことが許されなかった状況を伝え、その標本を一斉焼却してしまうという厚生省、療養所の方針に反対した活動についてのべた。その活動を通じて、当事者（特に女性）の権利と「いのち」の倫理を市民の立場から深めて行かなければならないことを自覚しているとむすんだ。

第8回 (11月4日)

「脳死者からの臓器移植」をテーマにした授業実践 (高橋麻由：京都大学大学院人間・環境学研究科)

3つの中学校での授業実践結果を報告した。「臓器提供を待つ家族」と「脳死に近い状態の家族」の双方の立場の資料を用意し、生徒に考えさせた。授業を繰り返す中で、生徒の思考をより深められるよう、発問の内容を変更した。一連の実践を通して、「自分の臓器提供」と「自分の家族の臓器提供」の間のジレンマに気づかせる発問が、生徒の考えるきっかけにつながるのではないかと、ということが示唆された。発表後、授業者自身の立場の不鮮明さや、分析方法の不十分さ等をご指摘頂いた。多くの方から貴重なコメントを頂き、励みとなった。

第9回 (12月16日)

医療事故死遺族へのグリーフケア——医療者は「遺族」のグリーフワークをサポートできるのか (打出

喜義：金沢大学医学部附属病院産婦人科)

医療事故死遺族のグリーフワークは、その死因が事故か過誤かの得心からスタートする。だが現実としては、その境が曖昧なことに加え、医療者と遺族間で境界の認識が異なることから遺族のグリーフワークは進まず、不満な遺族は訴訟を起こすことになる。ところがその裁判では満足するどころか、なお対立が鮮明化し遺族のグリーフワークは頓挫する。本発表では、医療者の行なうグリーフケアの前提として医療現場の信頼再興を掲げ、医療プロフェッショナルとしての責任と義務の自覚がその第一歩となる可能性を述べてみた。

第10回 (2011年1月20日)

石門心学における死生観——石田梅岩の思想を中心に (澤井努：京都大学大学院人間・環境学研究科)

本発表では、「石門心学」の創始者で、自らを「儒者」と称した石田梅岩 (1685～1744) の死生観を考察した。一般的に儒教は靈魂の問題や祖先祭祀を主題化するが、江戸時代の儒教がそれらに言及することはほとんどない。それを歴史的に捉えれば、仏教が喪の儀礼を一手に担ったとすることができる。発表者は、梅岩が民間信仰レベルにおいて祖先祭祀を行い、自らの開悟をとおして「生」「死」を超克した存在に生きることを強調したことを指摘した。今後、聴衆の方々からいただいたご指摘を踏まえて、梅岩のテキストをさらに精緻に読み込んでいきたい。

第11回 (2月3日)

生体肝移植ドナーへのインフォームド・コンセントの在り方についての考察 (永田明：愛媛大学大学院医学系研究科)

生体肝移植ドナー経験者からの聞き取りで、医師からの手術前の説明は、家族の生死に関わる情報のみが記憶に残り、自らの詳しい説明の内容は記憶にないと語ったドナーが多い。手術の後に傷の大きさや形などでショックを受けたが、自分が選択したことだから引き受けるしかないと諦めているという現状を報告した。また、米国で行われている「生体ドナーの権利擁護」に関する活動も紹介し、日本で同様の活動が可能かをディスカッションした。参加者の意見から、今後の研究の取り組みの示唆を得ることができた。

本研究会は平成23年度も開催している。参加自由なので奮ってご参加願いたい。

臨床倫理セミナー in おおさか

竹内 聖一（本 G-COE 特任研究員 哲学）

平成 23 年 2 月 20 日（日）に、本 G-COE と、大阪の臨床倫理事例研究会との共催で、「臨床倫理セミナー in おおさか」が開催された。このセミナーは、G-COE 事業推進担当者の清水哲郎教授が中心となって実施している医療・介護従事者対象のリカレント教育の一環として行われているものである。大阪での開催は 2010 年 8 月に次いで 3 回目となる。会場となった大阪厚生年金病院看護専門学校には、10 病院から 180 名あまりの医療従事者が集った。回を重ねるごとに参加者数が大幅に増えており、この地域における臨床倫理への関心の高さがうかがわれる。また、G-COE からは会田、竹内、福岡の研究員 3 名が参加した。

セミナーでは、まず清水教授が小冊子『臨床倫理エッセンシャルズ』をもとに講演を行った。ついで、事例研究会から提供を受けた症例をもとにして模擬的に事例検討を行った。この事例検討には清水教授、石垣靖子教授（北海道医療大学）に加え、3 名の研究員も参加した。参加者からは、これにより事例検討のイメージをつかむことができ、有益であったとの声も聞かれた。

講演の後、参加者は 7 名程度の小グループに分かれて、2 つの事例を検討した。

第一の事例はがんの末期にある患者に対する治療方針の説明をめぐるものであった。医師は患者の希望を支えようと、あえて予後を伝えない仕方での治療方針を説明していた。他方、プライマリーナース（その患者の看護に一貫して責任を負う看護師）は患者に予後を伝えるという選択肢もあるのではないかと考えていた。こうした意見の対立のため、病状がいつこうに改善されないことに不安を訴える患者に対して、プライマリーナースが適切に対応できないという問題も生じていた。事例検討では、患者に予後を伝えることの是非に加えて、医療スタッフ間の意見の対立にどう対処してゆくのかということも議論された。検討後の発表では、やはり患者の知る権利や決定権は尊重されるべきであることが再確認された。その上で、どう知らせるかということに工夫の余地があったのではないかと、という意見が出た。また、意見の対立に関しては、プライマリーナースの負担を軽減することや、カンファレンスの充実が必要だという

意見が出た。さらに、患者の利益を第一に考えるなら、医師と看護師の間で意見の対立が生じないような組み合わせを検討すべきではないかという指摘もあった。

第二の事例は、消化器系統に発見されたがんが短期間のうちに悪化したため、人工肛門の装着を余儀なくされた上、身の回りの世話を看護師の全面介助に頼らざるを得なくなった患者の事例であった。患者は介助にあたる看護師に当たり散らし、暴言もみられたため看護師は対応に苦慮していた。報告後の質疑応答で、患者は以前は人を笑わせるのが好きな性格であったこと、また、看護師の中でもパウチ管理を担当していた認定看護師に対しては怒りの表出が見られなかったことが明らかとなった。これをふまえて事例検討が行われた。検討後の発表では、患者の環境が短期間のうちに激変したことから、怒りの表出はむしろ自然な過程であることがまず確認された。また、全面介助に頼らざるを得ない患者にとって、こまごまとしたことをその都度説明することはわずらわしく、それが怒りの表出につながっているという可能性も指摘された。また、患者の性格がいつ頃から変化したのかを知ることの重要性も指摘され、そのためには患者が以前かかっていた他の診療科と連携し、患者についての情報を得る必要があるとの意見も出された。

事例検討後の各グループの発表からは、臨床倫理の考え方が浸透しつつあることがうかがわれた。次回は 7 月に予定されており、研究・実践両面で、今後ますますの協力が期待される研究会となった。





竹村 初美 (若手研究者支援研究費受給者 宗教学)
／甲斐 義明 (人文社会系研究科博士課程 美術史学)

去る 2011 年 3 月 10 日、法文 2 号館第三会議室にて第 29 回死生学研究会が開催され、竹村初美と甲斐義明が報告を行った。各報告の概要を下記に記す。

竹村報告「日本人と「癒し」のハワイ——ポストモダンのスピリチュアリティと日本人のハワイ観」

ハワイは日本人の欲望を映し出す鏡であり続けてきた。19 世紀末から今日まで、日本人は幾度かの「ハワイ熱」を経験してきたが、それらはいずれも、それぞれの時代に生きる人々の夢と欲望をこの島に投影するものだった。今回の発表では、日本人によるハワイ表象の変遷を手短かに紹介した後、1990 年代から見られるようになった新たな傾向に焦点を当てた。

90 年代から発信されるようになったハワイ像、それは訪れる者に「癒し」をもたらすパワースポットとしてのハワイである。いわゆるスピリチュアルブームの中、ハワイ、とりわけハワイ先住民の文化は、スピリチュアルな商品として提示されるようになった。当日はその例として、90 年代以降に国内で発表された小説・セラピー本・映画・ヒーリング・イベントなどを紹介した。

こうしたハワイ関連のエンターテイメントにおいて語られるスピリチュアリティは、多くの場合手軽な消費の対象にすぎない。だが、中には真剣に霊的な探求を行おうとしている人々もいる。たとえばある種のフラの実践者がそうだ。発表では、特に二十代後半から四十代前半までの女性たちに注目しながら、この点について論じた。

なお、癒しの島というハワイ表象にはしばしば「ハワイの日本化」が伴う。ハワイ文化が脱文脈化され、日本人のスピリチュアルなニーズに合わせて語り直されるのである。とりわけ頻繁に見られるのは、いわゆる「古神道」とハワイ先住民の宗教とを重ね合わせるナラティブである。

こうした新しいハワイ表象は、日本人がハワイに求めるものの変化、ひいては日本人が欲求するところのものの変化を示している。より大きな文脈から見れば、これは現代社会における「宗教性の全域化」現象の一部を成すものでもある。人々の霊性は制度的な宗教の内にはなく、たとえばこのようなところに、その表現形式を見いだすのだ。(竹村初美)

甲斐報告「19 世紀芸術写真における眠りと死」

本発表ではヘンリー・ピーチ・ロビンソンの作品を中心に、19 世紀芸術写真における眠りと死の表象について考察を行った。まず、死者を追悼する行為において写真がどのように用いられてきたかを、発表者が企画に関わった「時の宙づり」展 (IZU PHOTO MUSEUM、2010 年) の出品作を示しながら説明した。特に印象的なのは、死者の遺影が毛髪と組み合わせられて額装されたり、アクセサリーに仕立てられたオブジェである。死者の記憶をより鮮明な形で留めておきたいという人々の願望を反映した制作物と見ることができる、これらの作例に用いられた写真は、死者の生前時に撮影されたものであるが、19 世紀においては、遺体を撮影した没後写真が制作されることも珍しくなかった。没後写真において特徴的なのは、遺体があたかも眠っているかのように写し出されている点にある。つまりそれらは被写体の死を肯定すると同時に否定するイメージである。つづいて、ヴィクトリア朝の芸術写真家ヘンリー・ピーチ・ロビンソンの作品における死と眠りの主題について述べた。ロビンソンは「臨終」(1858 年)、「シャロットの女」(1960 年)、「眠り」(1967 年) といった写真作品で、死の床にある人物、あるいは眠りにについている人物を描写している。同時代の絵画から借用したこうした主題をロビンソンがとりわけ好んだのは、当時の写真技術では、静止状態で横たわっているポーズがもっとも扱い易かったからである。しかしながらロビンソンの意図に反して、写真においては「眠り」の場面は凶らずも「死」を強く喚起してしまう。なぜなら、眠っているふりをしてしているモデルの写真も、外見上は本物の遺体の写真と区別がつかないからである。それは絵画の模倣と考えられてきたロビンソンの芸術写真に宿る「写真性」の証でもあることを指摘した。(甲斐義明)





渋下 賢 (人文社会系研究科博士課程 言語動態学)

2011年2月28日～3月5日にかけて、東京大学において平成22年度アカデミック・ライティング (Academic Writing) 集中講座が開かれた。講師は、ウエスタンミシガン大学 CELSIS (The Career English Language Center for International Students) において、英語を母語としない学生に対する英語教育を担当しているトマス・マークス (Thomas C. Marks) 先生で、5年間に及ぶ日本での英語教育の経験をお持ちである。受講生は様々な研究分野 (イスラム学、言語学、社会学、中国文学、哲学、日本文学、文化人類学) に渡る若手研究者7名であった。各々、この講座が目標として掲げる「英語による論文執筆能力の向上」と「研究成果の海外発信」を目指し、高い動機づけを持って課題に取り組んだ。

当講座は、6日間連続で毎日7時間集中して行われ、きわめて密度が高く、内容の濃いものであった。講座は、午前はマークス先生による講義と共通の課題、午後は受講生が持ち寄った草稿のピア・レビューという形で進められた。この講義でマークス先生が最初に強調されたのは、「アカデミック・ライティングは会話 conversation である」という簡明なメタファーであった。すなわち、アカデミック・ライティングとは、読み手の言っていること “they say” と書き手の言っていること “I say” を、スムーズに展開する会話のように噛みあわせることである。講義を通じて、マークス先生から提示された、多岐にわたる具体的なライティングの指針や方法は、すべてこのメタファーに帰して理解できる。まず、論文を書く目的は、書き手である自分自身と想定される読み手との間のギャップを埋めることであり、そのためには自分の論文がなぜ重要で、読み手が読む必要があるのかを示さねばならない。読み手を呼び込めたとして、自分の議論を説得的に展開するためには、根拠に基づいた理由とともに主張を行わなければならない。その前提として、当然、読み手の「言っていること」を適切に要約・引用し、それに対する書き手の立場を明らかにしなければならない。より細かい点としては、論文執筆を通じて、読み手が論旨を見失わないよう metacommentary を適切に用い、できるだけ動

詞構文を用い、より簡潔な語彙を選ばなければならない。

こうして「なければならない」を挙げていくと、すべて頭では分かっているものばかりである。しかし、ピア・レビューを通じて、分かっていることを実際に行うことの困難さを身にしみて痛感させられることになった。ピア・レビューでは、文字通りの意味での会話が、各受講生の草稿をめぐる展開され、読み手からのレスポンスが直接即時に書き手へ帰ってくるといって非常に稀有な機会となった。「会話」は必然的に、草稿の内容をめぐる「議論」へと発展し、読み手から書き手へ疑問が次々と投げかけられた。マークス先生は、受講生間の、ややもすれば覚えのない英語での議論に、一言も漏らさぬかのような勢いで耳を傾けておられた。そして、決して唯一の絶対的に正しい表現を押し付けることなく、我々受講生の議論の内容をくみ取った英語表現を提案してくださった。

このようにして、マークス先生のアカデミック・ライティングに対する明確な指針、受講生間が与えあった知的刺激、先生の忍耐と寛容により、「英語で作文をする技法」のような無味乾燥な知識の伝達からはほど遠い、実に生き生きとした、インタラクティブな講座となった。我々若手研究者は、この場で得た経験を活かし、研究成果の世界規模の発信へと実現化すべく努力していく所存である。最後に、このような素晴らしい機会を提供してくださったマークス先生、グローバル COE の先生方、受講生仲間へ感謝申し上げたい。この文章そのものが、この講座がもたらした成果になっていることを祈りつつ。





東 ゆみこ (本 G-COE 特任研究員 神話学・文化研究)

第一次世界大戦で過酷な経験をしたドイツの哲学者フランツ・ローゼンツヴァイク (1886-1929) が、塹壕の中で着想を得て書き始め、1921年に出版した『救済の星』には、死生学的想像力を大いにかき立てるものがあるであろう。

人はなぜ死に対して恐怖を感じるのか。それは、このかけがえのない「私」というものが消滅するゆえである。「冷酷な死」という「突然飛来する砲弾」は、唯一無二であったはずの「私」を、問答無用とばかりに、一つの単なる「それ (= エス Es)」に解消してしまう。死の恐怖とは、「私」からエスへの変化に対する恐怖なのだ。

こうしたローゼンツヴァイクの「私」やエスをめぐる思索は、死生の問題とも密接な関係を有している。だが、そもそも「私」やエスとは何なのか。この難問について、避けて通ることのできなかつた者たちの思想的連なりをたどったのが、今回紹介する互盛央氏の著書『エスの系譜』である。タイトルのエスはイド (id) とも呼ばれ、精神分析学者フロイトが医師グロデックにならって名づけ、有名になった概念である。

フロイトのエスとは、意識の統御を超えた無意識的な心の領域を指しており、暗黙のうちに我々を動かしているかもしれない^{エックス}Xのことである。ある意味、この^{エックス}Xは、「自由な選択を行う自覚的・理性的な人間」という近代の前提を脅かすもの、近代的な人間像を「時代おくれの妄想」として片付けてしまうほどの威力を持つものであると、スチュアート・ヒューズは『意識と社会』の中で指摘した。

一方、グロデックのエスは、自我と対立するものとみなすフロイトとは異なり、肉体や精神や自我といった幻想を生み出す母体、ゲーテの考える「神なる自然」を淵源とするものであったと互氏は述べ、フロイト的なエスの捉え方を第一のエス、グロデック的なそれを第二のエスと呼んでいる。そして、この相違の起源となっているリヒテンベルクの哲学から、エスに対する考え方が徐々に二つに分岐するさま、その分岐がところどころで絡み合うさま、エスにまつわる壮大で迷路のような思想の見取り図を、大胆かつコンサイスに描いている。著者の分類によれば、第一の系譜としてはリヒテンベルク、フォイエルバッハ、ニーチェ、ランボー、マツ



八、カルナップやシュリック等のウィーン学団の面々。第二の系譜としてはフィヒテ、シュリング、ビスマルク、ハルトマン、バレス、スーリーといった人々がいる。

彼らは系譜全体からすればごく一部にすぎない。実際、本書を読み進めると、冒頭で述べたローゼンツヴァイクをはじめとする多くの人々がエスについて思索を巡らしていたことがわかり、驚くばかりであった。エスは西洋の思想家たちの重要な関心事であったのだ。

くわえて評者が刺激を受けたのは、第二の系譜の中に、エスを人種ととらえる見方が含まれており、ドレフュス事件やナチスによるユダヤ人虐殺にまで及ぶ、世界に衝撃を与えた国民国家の危機的状況とも密接につながっていたということである。エスは精神分析学の用語に留まるものでなく、その範疇を超え、西洋思想史の問題として充分検討に値するものであった。無意識については、ヒューズが社会思想史的な位置づけを行ったが、エスについては、互氏の著作によって、ヒューズとは別のやり方での思想史的な位置づけの可能性が示されたと言えよう。

ところで、本の中で触れられている^{ぼんがいう}ショーペンハウアーの哲学は、古代インドの梵我一如の思想と直結している。東洋思想の西洋思想への影響は、死生とエスの関係について、さらなるアプローチを可能にすると思われる。しかし、それはこの一冊を経た後の話ということになる。

(講談社、2010年10月6日刊)



研究機関誌『死生学研究』第15号と特集号を発行いたしました。各号の詳細は下記の通りです。

『死生学研究』第15号

死 宗教と医学のあいだ
ジャン・ボベロ

恐怖管理理論における死と宗教
宗教は死の不安の緩衝なのか
イーリャ・ムスリン

現代韓国における死生観の変容
秋葉隆の「二重構造モデル」への批判的検討を通じて
新里喜宣

シオランの自殺念慮と自己受容
無用性から無名の宗教性へ
藤本拓也

ムスリムの他界観研究のための覚書
イブン・アフマド・アル・カーディーとサマルカン
ディーによる他界論をめぐって
大稔哲也

シンポジウム「生命の資源化の現在」
生殖における身体の資源化とフェミニズム
日本とアメリカを中心に
荻野美穂

代理出産と不妊相談
ドイツにおける法と社会実践
小椋宗一郎

なぜ私は代理出産に反対するか
大野和基

医療現場から見た生殖医療の問題点
久具宏司

コメント 市野川容孝／柳原良江

討論

ビザンティンと西欧中世における生動するイコン
比較的観点から
ミケーレ・バッチ

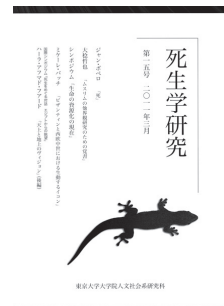
国際シンポジウム「死生をめぐる対話 エジプトからの眺望」

天井と地上のヴィジョン
スーフィズムの初期モデルをめぐって（後期）
ハーラ・アフマド・フアード

シャブタイ派思想の靈魂転生論
蛇の戯れとメシアの靈魂の系譜
山本伸一

医療事故遭遇患者・家族のもつ感情
訴訟事例から
奥津康祐

欧文レジュメ



(2011年3月31日発刊)

『死生学研究』特集号：日韓国際学術会議「東アジアの死生学へ」

開会挨拶

韓国側代表 李熙穆
日本側代表 池澤優

閉会挨拶

金森修（東京大学教授）

.....

第一部

「儒教的生命倫理」における“伝統”

Juria Tao ed., China: Bioethics, Trust, and
the Challenge of the Market (2008) を題材として

池澤優（東京大学教授）

編集後記

.....

韓国人の儒教的死生観に関する研究

栗谷李珥

崔一凡（成均館大学校教授）



第二部

知的融合言説としての「死生学」研究

鄭孝雲（東義大学校教授）

原爆マンガにおける責めの考察

『夕風の街 桜の国』を題材に

山崎浩司（東京大学特任講師）

(2011年3月15日発刊)

第三部

死生を位置づけるということ

伊藤由希子（東京大学特任研究員）

韓国漢詩における傷逝の伝統と植民地

期の挽詩

韓榮奎（弘益大学校講師）

総合討論

目次

— CONTENTS —

● 巻頭エッセイ ●

3・11後の死生学

「起きてはならないこと」が起きたあとで 池澤 優 2

赤川 学 3

● イベント報告 ●

国際・公開シンポジウム『イメージとヴィジョン 東西比較の試み』を終えて

秋山 聡 4

シンポジウム「食べられなくなったらどうしますか？～認知症のターミナルケアを考える」

会田 薫子 5

ジュリアン・サバレスキュ教授講演会「未来に合ってるだろうか？

—現代テクノロジー、リベラル・デモクラシー、道徳的向上の差し迫った必要性」

福間 聡 6

第10回東西哲学会議

竹村 初美 7

臨床死生学・倫理学研究会 平成22年度

山崎 浩司 8

臨床倫理セミナー in おおさか

竹内 聖一 10

第29回死生学研究会

竹村 初美／甲斐 義明 11

Academic Writing as a Conversation

渋下 賢 12

● 書籍案内 ●

書評 たがいちりお 互盛央著『エスの系譜—沈黙の西洋思想史』

東 ゆみこ 13

『死生学研究』15号

14

『死生学研究』特集号

日韓国際学術会議「東アジアの死生学へ」

15



死生学 DALS ニュースレター No.29

平成23年8月2日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 一ノ瀬 正樹

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.i.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>